

Alma Mater

白陵

第12号

平成5年1月1日発行

発行 白陵会

〒676 高砂市阿弥陀町阿弥陀2260

TEL. 0794 (47) 1675(代)



謹賀新年

新たななる未来へ

こよなく美しい環境と、おおらかな自然が若者たちの心をいやし、そのひんやりとした大地や朝露が、若者たちに正気をとり返させる。

大自然にめぐまれた教育の森「白陵」は、いまここに創立の日を迎える。理想と現実の狭間を木の葉のように揺れ動いた三十年。

過ぎにし歳月を記録にとどめ、次代の若者たちの心に美と感激を呼びさまし、澄みきった知性と豊かな教養への憧れを育む。

新しい未来にむけて、ここに時をきざむ。

― 学校法人三木学園 三十周年記念誌より ―



理事長 三木 一 正

刻を告げよう、未来にむかって

声高らかに刻を告げる西の年は、意気衝天に未来を謳いあげる白陵三十周年の年でもあります。

昨年十一月九日の創立記念日にはほんとうにお世話になりました。同窓会から贈られた小庭園「陵友の苑」は校舎に近く、後輩たちの登下校時の立居ふるまいを優しく見守ってくれているように思えますし、卒業生諸君におんぶした当日の朝刊一頁の全面広告など感謝の気持ちで一杯です。

十一月九日は開校前年の昭和三十七年のその日をさしていますから、今年の十一月八日までの一年間を創立三十周年と呼ぶことになりました。昨年暮の十二月十九日には記念講演会として、東京大学総長有馬朗人先生をお迎えして「自然の対称性について」と題するご講演を一時間、生徒の質疑応答を一時間、その前日には職員との座談会を約二時間と、考えられないような有意義な一刻をもつことができました。人生のなかでいろいろな意味での出遭いほど大切なものはありません。今回のこれらの催しが、若い生徒諸君に深い感銘を呼び起こしてくれたものと信じています。式典当日には初代教頭の川戸茂先生も顔を見せられ、懐かしさのあまり握手攻めにあつておられました。その祝賀会の席上で創設者三木省吾学園長を偲んで披露された「安らげく 君天国の 菊に酌め」の一句は、理想を現実のものにせんと着実な歩み続ける現在の白陵と、今は亡き学園長との一体感を、会場全体にうきほりにしてくれたように思います。八十一才とは思えぬ凛々朗々とした川戸先生の吟詠に、過ぎにし三十年の思いが一つになった瞬間でもありました。

世界は大きく動き、新しい時代に入ろうとしています。教育現場もいままさに変革の時代です。週休二日制然り、偏差値問題また然りです。しかし教育現場に一番必要なものは、その学校の基本概念でありましょう。どんな人間を育てようとしているのか？ そのためにどんな教育をしようとしているのか？ 時代におもねることなく真理探求の精神を忘れず、新しい人材を輩出していくことが白陵の真価でありましょう。

本年が、干支の酉に因んで、未来への新しい刻を声高らかに告げることのできる年でありませう、心より念じて、年頭のご挨拶といたします。



校長 八木 誠 造

新しい春を迎えて

新年明けましておめでとうございます。平成五年の幕明けも、素晴らしい初日の出とともに始まったような気がいたします。

同窓会のみなさんも、希望に満ちた新しい春を迎えられたことと存じます。昨秋は学園創立三十周年の記念式典が盛大にとり行われました。同窓会のみなさんの積極的な参加が心強く感じられ、深い感銘を受けました。「陵友の苑」を贈っていたこともその一つでしょう。心よりお礼を申し述べます。

私どもの学園も、ようやく青春期にはいつてきたような気がしてなりません。文字通りこれから大きく飛躍するときでもありません。

ひるがえって私も当面している教育のことを考えますと、教育ほど難しいものはないと思っています。本来、教育とはどのようなことなんでしょうか、考えることがよくあります。

人間形成をはかることが教育なのでしょうが、その過程にいろいろな力がはたらいて、輻輳していることは間違いありません。社会的環境・自然的環境・先天的素質・教育的作用、これらの四つのカテゴリーが互いに交錯しあっていると考えています。前者の三つは、そのことが生起する前に生起していて、価値の選択はなかなか行い難いものであると思われまふ。そしてこの三つのもが関連しあっていることは、どう否定しようもない現実だと思っています。

もう一つの「教育的作用」は、目的意識をもって、望ましい方向に自己統御をしようとするいとなみではないかと考えています。つまり、教育は人間形成をはかる有力な手段であるけれども、すべてではないのではないかと思うことがよくあります。教師のいかなる努力をもつても、意の如くいく部分といかない部分があるように思われます。それほど教育とは厄介で、難しいものなのでしょう。

私どもの白陵はこれらの困難性を克服して、学問の府としても、教育の殿堂としてもゆるぎないものであるようにしたいものです。

どうか今後ともご支援くださるようお願いして、新しい春を迎えたごあいさつといたします。



ごあいさつ

新年、明けましておめでとうござい
ます。年頭にあたり母校三十年の歩み
を振り返り、皆様とご一緒に未来へ向
けて心からの声援を贈りたいと思いま
す。

我が母校も今春には二十八期の卒
業生を送り出し、卒業生数も四千五百
名に近づこうとしています。プレハブ
教室三棟で出発した創立当時からいま
さに隔世の感があります。四季を通じ
安らぎと潤いを与えてくれた学園道路
の櫛並木の成長が歴史と伝統を教え、
例年の大学合格発表は全国的な名門
校としての世間の評価を如実に伝えて
くれます。そして多感な青春期に出
合った白陵の峻烈な教育は、文字通り
育英の道に身を焼き尽くされ、地の塩
となられた故園長先生の人生訓とし
て、我々の自己認識の中に強烈に生き
続けています。

時は流れ時代は変化し、今や白陵で
は卒業生が教壇に立ち卒業生の師弟を
教えるという時代を迎えており、激変
する世界情勢と共に時の流れを痛感す
る昨今です。目まぐるしく移り変わる
時代にあつて、園長先生の急逝という
予期せぬ暗雲を見事に払拭し、先生が
築かれた基礎を発展させ華開かせた白
陵の原動力は何処にあるのでしょうか。

会長 沼田 好道

私は、高邁な教育理念の下、一枚岩と
なつて力を結集し、事に当たられた三
木理事長先生、八木校長先生をはじめ
とする諸先生方のご努力と後輩諸君の
研鑽にほかならないと思います。そし
てそこには校是である「研究と訓練」
「独立不羈」「正明闊達」の実践に
よつて養成された強い精神力が存在し
ています。自学自習の定着を図り、真
摯な努力の積み重ねによつて志望を現
実のものにさせる学習指導、生徒自身
を守るための折に触れての躰指導、白
陵ではこれらが一体となつて各人の精
神力が強化され自己の確立へと導かれ
るのだと思います。真に一流となるた
めには、スポーツ同様、基本には厳し
さがなければなりません。今のような
甘い時代にあつて、白陵の存在は今後
一層その輝きを増していくことでし
ょう。

我々同窓会員は、このような素晴ら
しい学舎で学び得た事を誇りとし、後
輩諸君に恥ずかしくない足跡を残すよ
う努めたいと思います。母校の益々
ご発展と会員諸氏のご活躍ご多幸をお
祈り申し上げますと共に、同窓会活動
への一層のご理解ご協力をお願いしご
挨拶いたします。

創立三十周年記念庭園

「陵友の苑」^{その} 寄贈



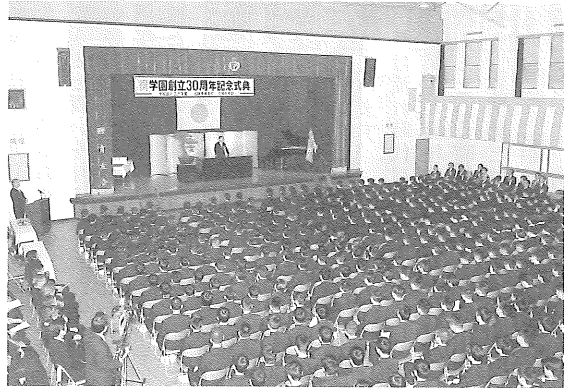
白陵会では、母校の創立三
十周年を記念し、我々の想い
が永久的歴史に刻まれること
を願つて、本部管理棟前にさ
やかな庭園（工費 七十万
円）を寄贈いたしました。

製作に当たつては、学校と
相談し、キンモクセイとギン
モクセイを中央に植栽し、石
庭風に大小の庭石を配した上
品な庭にいたしました。

年代を越えて、同窓の友が
幅広く共に語らう庭という意
で、「陵友の苑」と名付けた
この庭を、親子二代で訪ねら
れる方々も年々増えてくるこ
とでしょう。

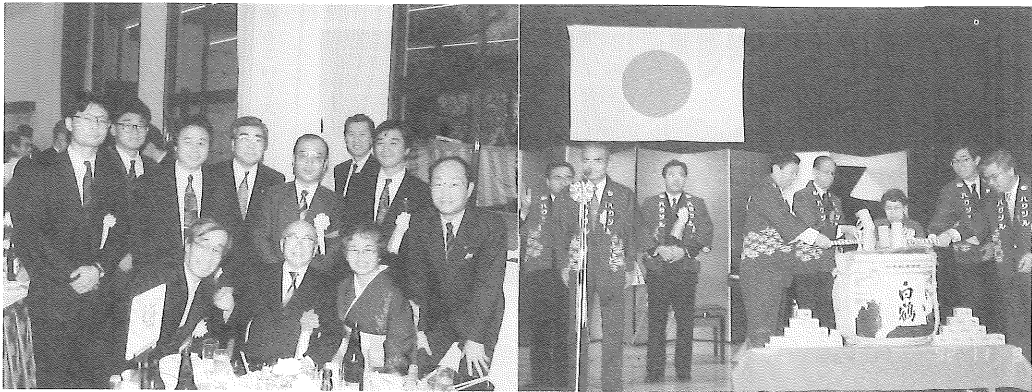
母校訪問の際には是非一度
お立ち寄り下さい。

創立三十周年記念式典盛大に挙行



各地で祭太鼓が賑わい、山々は紅葉で色づく、平成四年十一月九日、学校法人三木学園・白陵高等学校の創立三十周年記念式典が風堂々の白陵キャンパスで厳粛かつ盛大に挙行されました。白陵会からは、沼田会長、森本副会長、天野副会長、上田副会長、遠山初代会長、黒川前会長をはじめ理事が会を代表して出席し、各界の来賓と共に母校三十年の歩みと栄えある式典に心からの祝意を贈りました。

式典は、会場の体育館内中央に、九四八名の在校生が整然と着席するなか午前十一時、濱田忠彦教頭の開式の辞により始まりました。園長先生はじめ創立以来の物故者に黙禱を捧げた後、三木一正理事長が、学園創設者の急逝等幾多の困難を乗り越えての三十年の歴史を振り返られて、「卒業生たちは初期においては「礼節」を、近年は「進学」を伝統として残してくれた。次の世代はきつと「品性」という名の伝統をつけ加えてくれるに違いない。今の白陵に必要なものは文化土壌の構築とその高揚である。今後は師弟一体となって建学の精神に立ち返り、「こだわり」と「広がり」を基調に新たな未来へ向かって挑戦していきたい」と力強い式辞を述べられました。次に各界からの来賓を代表し、貝原俊民兵庫県知事(副知事代読)、日下晃兵庫県私学総連合会長、後援会名誉会長でもある地元の足立正夫高砂市長と戸谷松司姫路市長、そして井上喜一衆議院議員、一期生でOB初の育友会長に就任された八木芳章氏の六名の方々から心暖まる祝辞が寄せられました。この後、式典は感謝状贈呈、各種表彰へと続き、在校生を代表し高校三年生の奥公秀君が感謝と決意を頌詞で読み上げた後、八木誠造校長の謝辞で締めくくられました。



この後、引き続き午後からは場所を白陵会館へ移して、記念祝賀会が催されました。

昭和五十七年に創立二十周年を記念して建設された白陵会館は、白陵会にとっては、園長先生と最後に接した思い出深い建物でもあります。本会は、昭和五十五年、故園長先生のご要請により、黒坂康夫第二代会長の下、再スタートをきりました。その後、学校の全面的な協力により「白陵会名簿」を発刊したのを手始めに、会報「Alma Mater 白陵」を創刊、更には二十周年記念事業への協賛と暗中模索の中で努力はしたものの、白陵会館建設資金募集については十分なお役に立つことができませんでした。しかしながら学園ではこの誕生日もない白陵会を暖かく見守って頂き、図らずも竣工披露の宴にお招きを頂きました。その席上再会を喜び喜色満面の園長先生から、在校当時さながらに各々があだ名で呼ばれて恐縮しながらも、抜群の記憶力で当時を再現し、かつ将来の理想を熱く語り語られるお姿に出席者一同大いに励まされたことが昨日のことのように思い出されます。これを機に本会の結束は大いに深まった訳ですが、あらゆる意味で本会活動の原点となっているのがこの白陵会館です。

話を元へ戻しますが、記念祝賀会は、校友の川副義文先生（二期生）と大内義博先生（二期生）の進行で、八木誠造校長の力強い開宴挨拶により幕を開けました。

武田健後援会長の音頭で景気よく鏡割りが行われた後、本会より同窓生を代表して沼田好道白陵会会長が、「母校が隆盛の中で盛大に創立三十周年を迎えることは誠に誇らしく無上の喜びです。創立以来三十年、一日たりとも停滞する事なく鮮やかに前進を続けてこられた不屈の歩みこそ、まさに白陵精神の神髄を示すものです。先生方のご努力に敬意を表し、賜りました数々のご指導に心より厚く御礼を申し上げます。今後いよさらばの発展を祈念します」との挨拶に続き、高らかに乾杯の音頭をとり宴を祝いました。会場には、現職員や懐かしい旧職員の先生方のお顔も見られ、園長先生急逝直後の校長の要職を務められた吉岡喬先生（現理事）やお元気なご様子で自作の俳句「安らけく君天国の菊に酌み」を朗々と詠まれた初代教頭の川戸茂先生、本校退職後も龍野文学資料館霞城館長として活躍され、園長先生胸像の題字や本会名簿の題字もお願いした二代教頭の山本武夫先生、学年主任や参事を歴任された寺田真一先生（社会）や山本年雄先生（国語）、生徒部長として馴染みの深い国司重吉先生（理科）などいづれもお元気で、学園の三十周年を夢のように喜んでおられました。



また、故園長先生の奥様の三木茂子理事も挨拶に立たれ、思い出話と共に関係者への心からの感謝のお気持ちも伝えられました。そして、圧巻はやはり恒例の白陵寮歌の高歌放吟でした。弊衣破帽とまではいきませんが、濱田忠彦教頭はじめ真正正銘の旧制姫高の先輩方を交え、懐かしの制帽を被り、和太鼓に合わせて心ゆくまで白陵の春の宵を満喫しました。最後に、学園を代表し故園長先生の従兄で旧制姫高の先輩でもあった宮崎昌美理事が、故園長先生と二人三脚での教員募集や第一回目入試準備等、辛苦の設立準備時代を振り返られ心からの謝辞を述べられました。一同そのお言葉にじっと聞き入り、改めて今日の隆盛に盛大な拍手を贈り盛会裏に幕を閉じました。

学園が、三十周年を記念して、校名校章をモチーフに作成された京都の(株)川島織物謹製の緞れ織り「飛翔」は、知的で明るくかつ躍動感溢れる若者の姿を紺碧の空に美しく舞う白鷺になぞらえ、学園の未来への限りない躍進と希望を象徴したものです。母校は三十周年を契機とし、正にこの絵柄の通り前途洋々の未来へ一層力強く飛躍することでしょう。

同窓会といたしましても、今後一層の支援を続けることは勿論、飛翔を続ける白陵の名に恥じない活動を続けて行こうと思います。同窓生諸氏の益々のご活躍ご発展をお祈り申し上げます。



大 学 入 試 制 度 の 変 遷 と 進 学 体 制 づ くり

このページは、学園が制作された創立三十周年記念誌の中から、「大学入試制度の変遷と進学体制づくり」進路指導部編を一部抜粋し、掲載させて頂きました。

少数定員制をとる本校の様な私学にあつては建前と本音を一致させることが至上命令とされる。即ち教育理念の実践と大学合格の実際との間に隔たりがあることは許されない。しかし、進学の歴史を振り返る時、創設期の焦燥感がそのまま数字となつてあらわれている。一期生で国立大学へ入学したのは当時の二期校へわずかの二名。東大へは六期生で始めて二名が合格したものの二桁合格を果たしたのは十九期生でやっと十一名だったから、開校後二十一年の歳月を要したということになる。一〇〇%進学が進路指導部の仕事である本校では、その間試行錯誤の挑戦反省を繰り返しての進学路線であつた。しかし昭和五十四年度の共通一次試験制度の導入以来、大学入試制度の度重なる変革に翻弄されながらも忍耐強く対応した結果、最近になつてやつと上位難関大学の合格実績が地方区から全国区入りを果たすことができた。ここにおいて本校の進学三十年の歩みを大きく三つの時期に分割し、その内容を振り返ってみよう。

進路指導部長 中安 久隆

●主要大学別合格者数推移

(国立大学)

大学	年度(期)						合 計
	昭41~45 1~5期	昭46~50 6~10期	昭51~55 11~15期	昭56~60 16~20期	昭61~平2 21~25期	平3~4 26~27期	
東京大学	0	8	19	40	90	50	207
京都大学	3	26	36	103	113	30	311
大阪大学	4	23	30	51	75	35	218
神戸大学	10	60	83	83	97	25	358
計	17	117	168	277	375	140	1,094

(私立大学)

大学	年度(期)						合 計
	昭41~45 1~5期	昭46~50 6~10期	昭51~55 11~15期	昭56~60 16~20期	昭61~平2 21~25期	平3~4 26~27期	
早稲田大学	16	50	59	135	97	51	408
慶応大学	9	35	59	103	93	50	349
上智大学	0	2	12	20	17	8	59
関西学院大学	39	193	117	114	106	35	604
関西大学	81	131	67	64	53	29	425
同志社大学	29	151	127	126	67	32	532
立命館大学	30	106	51	20	32	18	257
計	204	668	492	582	465	223	2,634

第1期 昭和四二年~昭和五三年

(一期生~三期生)

国立一期校・二期校及び関西私立大受験時代

●高校入試に専願制度導入 (昭和四六年)

●進路指導部発足 (昭和四七年)

一期・二期受験体制を貫くも、地方国立大に集中し、満足な成績を収めることはできなかった。しかし徐々に阪大・神大の合格者を出すと共に、五期生において始めて京大合格者を出し、十期生において漸く京大十名の合格者を出すことができた。

第2期 昭和五四年~平成元年

(四期生~四期生)

共通一次テスト導入期。地方国立大から京大、東大、阪大、神大、関西有名私立大受験時代

●一期・二期校廃止と共に国立大は大きくA・Bグループに二分され受験機会複数化

●九十分授業から七十分授業へ移行 (昭和五四年)

●校内模試による判定資料の蓄積 (昭和五七年)

共通一次導入という大変革時代を迎えた。この期前半においては共通一次の得点比率が大学独自の課す二次テストに比べ上回り、基礎力が重視された。進路指導部の発足による情報収集、七十分授業への切り変えによる進学体制づくりの充実と共に進学成績は大きく飛躍した。後半は二次テスト重視型となり、指導体制もさらに強化され、東大・京大二十名及び早大・慶大四五名を突破した。

第3期 平成二年~平成四年

(五期生~七期生)

共通一次テストに変わりセンターテスト導入。A・Bグループ連続方式に加え、分離分割制度の導入、東大を主に京大、阪大、神大、関西有名私立大から関東有名私立大受験時代。安全指向から脱皮して、全員上位校を目指して最後まで努力する体制へ切り換え、あくまでも目標を高く持たせ、成績上位者については従来の京大から東大進学指導への道をとった。二五期生においては、東大三十名、京大十四名、早大・慶大計五八名という輝かしい成績を取め全国から注目を浴びた。さらに翌年には、東大二十八名、京大二十二名、合計五十名という開校以来の成績を取めることができた。本校にもやつと伝統ができ、先輩から後輩への厳しい助言や、情報網が完成されつつある。

理想 「白陵と旧制高等学校」

今は亡き三木省吾学園長が、旧制高等学校の「シユルム・ウント・ドラング」(疾風怒濤)の時代を理想として、高砂の緑深い山懐の一角に我らが母校を創設されたのは昭和三十八年、三十二歳の時でした。卒業生の約半数が当時の園長先生の年齢を越え三十年の歳月を経た今日、先生が理想とされた旧制高校に想いを巡らし、先生の情熱によって生みだされたことを自覚し、母校白陵の更なる発展を祈りたいと思います。

白陵の範となり、先生自身が学ばれ理想とされた旧制高校の良さとは何であったのか。先生の講演会でのお話の中に旧制高校を語られた一節が残っていますのでご紹介いたします。

『今の東大の教養学部にあたる旧制第一高等学校に寄宿舎ができた時、当時名校長の間こえが高かった木下校長は、「今の世の中は、非常に華美な風があり、文弱に流れ奢侈に耽る風潮である。そこで寄宿舎の中に生徒を入れて、文弱に流れた外界との交わりを絶ち、そこに学問の場として一つの独特の世界をつくる」と箴城主義(城の中に立て籠もる)を宣言されました。この考え方は、現代にも通用するではないかと思えます。その後、一高の校長になられた加納先生もやはり、明治三十年の半ば位の時の一高での講演の際に同じ様なことを言われました。『凡そ国運の隆昌なるは甚だ好みすべき事なれども、衰微の種子は、絶えずその中に時かれつつあるの知らざる

べからず。万一此処に気付かずして太平を謳歌しつつ進まば、何時か怠慢心を生じて文弱に流れ、遂に逸楽奢侈に陥る事、改心すべき事なり」、つまり今の様に時代に流されて国運衰微の種子が時かれつつある事に気づかなければ、いずれ奢侈に流されて国が滅亡してしまうのだと警鐘を促す話ではなかったかと思えます』さらにもう一つ、昭和四十八年、先生が「旧制姫路高等学校の五十年と白陵の十年」と題し、後援誌へ寄稿された一文からも旧制高校のロマンを追いつ求められたお気持ちも伝わってくる箇所がありますので引用させていただきます。

『さて、このような十年間の発展充実を振り返る時、当初掲げた旧制姫路の長所を取り入れとていう唱い文句がどこまで実現できたかを顧み、改めて若者に対する時代の流れやその影響力の大きさを感ぜない訳には参りません。今年白陵の名の母胎をなした旧制姫路高等学校の創立五十周年記念祭がこの十月に行われますが、私の手許にある昭和十八年度版の姫路高等学校白陵寮寮歌集を開いてみますと、その序に次のような一文が載っております。『先人力強く営める白陵の起伏しにも滔々と流れをなせる時運の歩みにも、若人の真情の流露は凝って一聯の歌草をなし、その清にして純なる、簡にして勁なる、以て痴人の夢を啓くべく、以て懦夫をして起たしむべし。されば春の朝高く吟ずる時は高踏乱舞の調となり、冬の夕低く奏ずれば哀愁悲調の

曲と出で、げにうら若き口辺をこそ飾るに足るなれ。若き誇を思ふ多恨の我等にして、なぞて寮歌を愛さざるを得べけん。友よよしなき事を歎くいとまだにあらば、高欄によりて青春の一時しばし愁を捨てよかし」。勿論、多少の未熟さは認められるにしても現在の高校生にこのような文章が書けるのでしょうか。旧制、新制といつても年齢にしてせいぜい一年か二年の差しかないのですが、現在の高校生の如何に幼いことか。せめてもう少し格調高く、純粹で理想主義的な精神を現代の高校生によみがえらせたいと願います』

この二つの引用から、先生が我々に教示された旧制高校の佳き伝統の輪郭なりとも感じとて頂ければ幸いです。本物に憧れ自己の確立を期す若者達に、教養と人格の形成の場として競つて志したという、自由奔放の中にも節度と品位で統一された珠玉の輝きは、現代にも通じる価値観をもっていると思えます。しかし、現代の高校は大学受験を控えての厳しい修行期間です。その全生活はいかに効率的に受験カリキュラムを消化するかにあると言つても過言ではありません。父兄の負託にこたえ東大・京大等への進学実績の向上を目指す管理体制とは二率背反とも思われます。しかし、これらの理想と現実の間で悩みながら、宿命的な命題に挑み続けてきたのが白陵の歴史でありました。

当地方の数多くの中高校生の中で、遠くから眺めても後姿からでも一目見てそれとわかるのが白陵生と言われて

きました。その質素で純心な学生らしい举措、真摯ですがすがしい態度は、永年の歳月が養ってきた伝統です。草創期の熱気が渦巻く中、教師も生徒も父兄も、共々に驚き、戸惑い、幻滅や反発を感じながら、結局その烈しい熱気の渦にとけ込んで新しい学校づくりの懸命に努力し、今日の節度ある独特の校風が造られていったのだと思えます。そして近年では目ざましい進学実績を築き上げ、世の注目を浴びながら輝かしい勢いを示し、ほとばしる程の熱気に包まれています。しかしながらこれも一朝一夕にして出来たものではありません。三十年の歳月を経て、漸くにして自然に醸し出された天然の美酒なのです。

学園では、三木理事長はじめ諸先生方の弛まぬご努力によって、園長先生のご急逝による動揺を見事に払拭され、一日たりとも停滞することなく堅実な校風を継承しながら新時代にふさわしい方向へと鮮やかに脱皮を遂げられました。

しかし、我々にとっては、これからが正に真価を問われる疾風怒濤の時代の幕開けです。

それぞれの立場で一層の研鑽を積んで、白陵で学び、白陵で培った自己の確立を追い求めて行きたいと思えます。燃え立つ朱夏の時代を生き続け、そして白秋の時を迎える頃には、それぞれの教養と人格の豊かさが、即、人生の豊かさにつながることを知るに違いありません。(十期生 下村康夫)

白陵会ニユース

創立三十周年記念

神戸新聞特別企画に有志が協賛

白陵会では、創立三十周年を記念して学園が計画された神戸新聞掲載の特別企画に協賛し、会員有志による広告を募りました。上段には建学の精神・三十年の歩み・将来のビジョン等が力強く紹介され、下段には各界で活躍する各期卒業生有志三十九名の名刺広告が掲載されました。一頁全面に学園と同窓会の勇躍ぶりが凝縮したこの記事は創立記念日の十一月九日を期して兵庫県下全域に約五万部発行され、躍進を続ける母校の姿を広く県下に知らしめました。ご協賛賜りました方々は紙上からではございますが厚く御礼を申し上げます。



役員研修旅行実施

平成四年十一月、秋たけなわの北陸路へ一泊二日の行程で役員研修旅行が実施されました。研修レクリエーション委員会の企画で催されたこの旅行には、学校から、三木理事長先生、八木校長先生はじめ事務室のスタッフにもご参加いただき、役員相互の親睦を深めると共に今後の活動方針をじっくりと語り合う有意義な旅となり、参加した役員も仕事を離れ旅情を満喫しました。

住所変更の際はご連絡を

就職・結婚・進学で転宅された場合は、必ず事務局までお知らせください。ご連絡がないと、会報が届けられないほか、次回名簿作成にも支障をきたしますので、ご連絡を必ずお願いします。

なお、今回の名簿で住所不明となっております方々のご連絡先をご存知の場合は、お手数ですがご一報くださいますようお願いいたします。

平成四年版 白陵会名簿

只今好評発売中!

■販売価格 一冊 三、五〇〇円送料込
 ■申込方法 住所・氏名・卒業期生を明記のうえ、現金書留で学校事務局へお申込みください。(販売は同窓会員に限定させていただきます)

三十周年記念講演会に 東大総長 有馬朗人先生 来校

創立三十周年記念講演会が、十二月十九日、東京大学総長の有馬朗人先生を講師に迎え、在校生徒及び職員を対象に実施されました。先生は「自然の対称性について」の演題で約一時間にわたり講演されましたが、生徒諸君にとっては将来の指針の参考となったばかりか、現職の東大総長のお話に大いなる刺激を受けたようでした。

三十周年記念音楽会に

関西学院大学グリーククラブ

在校生徒対象の三十周年記念音楽会が、関西学院大学グリーククラブを迎え、十一月十日実施されました。日本や外国の聞き慣れたメロディーが次々と澄んだ歌声となって流れる、定評のある関学グリーククラブのコンサートに、日頃音楽には縁の薄い白陵生も暫し時を忘れ聞き入っていました。



旧職員 有吉 清先生 勲四等瑞宝章を叙勲される

秋の叙勲で、本校旧職員(数学)の有吉清先生が勲四等瑞宝章を叙勲されました。先生は永年に亘り兵庫県立高等学校で教鞭を執られ校長を歴任されましたが、その功績が認められたのです。

編集後記

新年あけましておめでとうございます。会員諸氏におかれましては希望に満ちた新年をお迎えのことと存じます。お正月休みで帰郷され懐かしい友と再会された方々も多かったのではないのでしょうか。さて、今回の会報は母校の創立三十周年記念特集号第二弾として新年号を兼ね記念式典を中心に構成しましたが如何でしたでしょうか? 話題が新鮮な内にと慌ただしく準備したため連載企画は省略しました。軍団集合・今昔物語・学校近況等は次号にご期待下さい。

ところで、三十年間で東大へ二〇七名、京大へ三一一名・・・等々も合格していたことをご存じでしたか? 我々も始めて知って驚きました。白陵って凄い学校になっていくんですね。

底ばい景気の快復を神に祈り、三十周年を機に益々躍進を続ける母校にあやかり、心機一転頑張りたいと思います。